

善良なる性情

——われ等の反省——

倉橋惣三

新幼稚園令の傑作の一つは、幼稚園の目的を規定せる第一條劈頭に於て、善良なる性情の涵養といふ語句を用ゐたることである。舊規定に於て、善良なる習慣といつてゐたのを更められたのであつて、簡單なる辭句の變更として見るには、餘りに深い差違である。

善良なる習慣といふ辭句も、解しやうによつては、相當の深さあるものには相違ない。往々にして淺く解せられた如く、單に外形的習慣といふ意味に止まるものではない。心性全體の習慣は即ち一種の性格と見らるゝものであつて、正しき考へ方、美しき感じ方の習慣は、すなはち、正しき美しき性格に他ならぬともいへる。少くも、外部行動の機械的習慣といふ如きものに限られたのではない。しかしながら、習慣といふ辭句自身は要するに、生活に對する形式方面の辭であつて、従つて、教育方法上の縛を多分に有して居る。習慣そのものが目的にあらずして、習慣によつて性格の作られるのが目的であつて見れば、即ち、習慣は一種の方法上の途である。之れに對して、性情なる一語、端的に幼兒教育の目的

の内容を提示し來つたものであつて、そこに、大いなる差別を認めざるを得ない。

しかも、そうした比較論は暫く別として、より重要な問題は、善良なる性情、そのものの意義である。善良なる性情とは果して如何なるものか。これこそ、徹底的に、詳密に、幼児教育者の研究しなければならぬ幼兒倫理學である。善良といふと雖も、幼兒生活に於ける善良とは何か、性情といふも、幼兒生活に於ける性情とは何か、必ずしも、單に常識的に片づけられる問題ではないのである。

二

しかも、吾人の茲に語らんとするは、その詳しき學問的研究ではない。幼稚園が此の目的を誤らざらん爲に、兎に角く必要なる、保姆その人の性情に就てある。保姆その人が必ず有しなければならぬ、善良なる性情そのものに就てある。之れは、われ等大人同志のことだけに、幼兒の場合よりは簡單明瞭に理解せられ得ることである。しかし、考へるには明瞭なことであるが、實際に於ては、六かしいことである。敢て問ふ、幼兒に善良なる性情を涵養せんとする我等は、自ら善良なる性情を潤澤に豊富に有し得て居るや。亦敢て思ふ。幼兒には善良なる性情が却つて豊かにあり、われ等にこそ、その難きを思はざるを得ないであるまいか。善良なる性情の缺け易きは、われ等にこそ、却つて多いのであるまいか。他のことは兎に角くも、善良なる性情に就ては、われ等の方が幼兒から教へらるゝこと多いのではあるまいか。——善良なる習慣ならば、或はわれ等が先きにして、幼兒が與へられることも多かつたか

も知れない。性情そのもの、眞實に於ては、それが却つて逆しまになることの多いことではあるまいか。

性情は性情である。知識でない。行動でない。理でない。形でない。「善良」に關してよく知り、「善良」を行ふことに過ちなしとして、それですぐに、性情そのものが善良なりや否やは別のことである。善良の性情とは善良であることそれ自體である。善良なる存在、善良なる實質そのものである。行ひ方よりも深く、考へ方よりも濃かな、性そのもの、實の姿である。——それが大人に六かしいのである。大人なるが故にまたしても六かしいのである。神に肖る幼児達には實の姿ではあつても、われ等には、此のわれ等には、影の姿となり易いものなのである。

三

今日も亦、幼児達に善良なる性情を養はんとて幼稚園にゆく。しかも、あの小さき、善良なる性情の所有者達の前に、自ら耻ぢざる人幾人がある。誤りて考へ、過ちて行ひ、不完全と、不整頓と、時には粗野と、無作法との間にさへ、きらめく如き善良の性情におのづからに頭の垂るゝを禁じ得ないのが常である。性情は、屢々、地殻の下に潜在する。あの頑な、岩石の割れ目に、ほとばしり出づる眞清水の清淨さよ。性情はまた、屢々、未熟の果實の中に包まれる。あの醜い表皮を透して、かをり出づる芳香のすがくしさよ。整へおさめ、時には、形づくり粧ひ、而して、下に穢土を藏し、裡に腐臭を貯ふる

ものゝ、その外面の善。上表の良。辛じて「善」と「良」とに制せられてゐる、不良にして不善なる性情の實在者。習性の卑怯と詭黠とに自ら己れを欺き、識らずして己れを粧ほふ天真の缺如者、——用語の過激なるを咎むる勿れ、幼兒の前に、耻ぢ隠れんとする我等の實相は皆之れである。——今日もまた、幼兒達に善良の性情を養はんとして幼稚園にゆく。自ら耻ぢて呆然たらざるもの幾人がある。